1.1 地域の祭りに参加しているのはどんな人か？

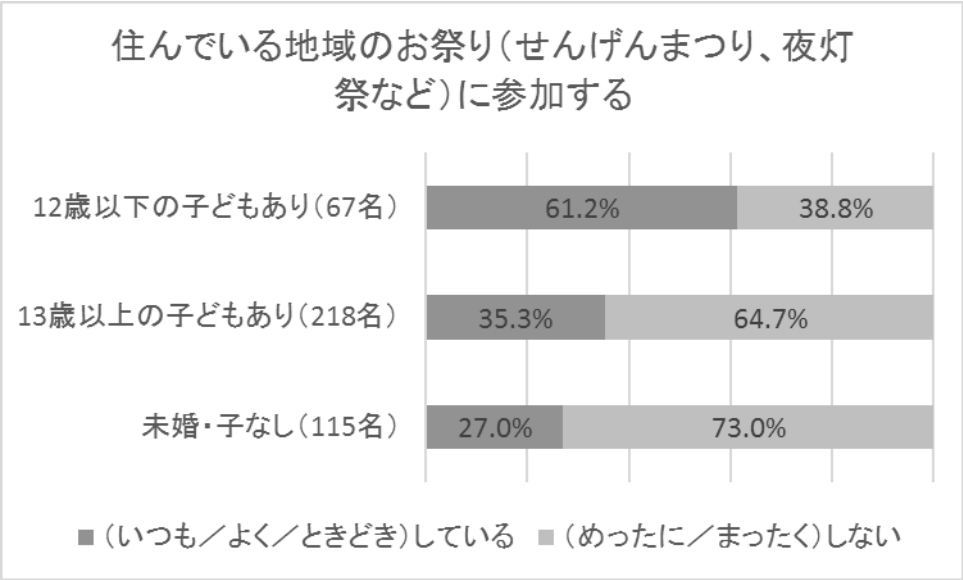

図 1.1 子の年齢別に見た地域の祭りへの参加（400 名）

近年、都市への人口流入によって地方都市における伝統的な祭りの存続が危ぶまれている。都市によっては、地元の祭りに参加しなければ罰金が徴収されるという理不尽にもみえる状況が発生している（神戸新聞ＮＥＸＴ「祭り休むと罰金 1 万円！　その深層には…　淡路島」2017/05/21）。稲毛区の祭りではそのような罰金制度はないが、地域の祭りに参加しているのはいったいどのような層の住民なのだろうか。

図 1.1 は、「住んでいる地域のお祭り（せんげんまつり、夜灯祭など）に参加する」という質問の回答を、12 歳以下の子どもをもつ人、13 歳以上の子どもをもつ人、未婚または子どもをもたない人の 3 つに分けて調べたものである。12 歳以下の子どもをもつ人は、地域のお祭りに参加する割合が多いことが際立つ。一方で、13 歳以上の子どもをもつ人や未婚、子どもがいない人の半数以上は地域のお祭りに参加していない。

以上より、私たちの調査対象となった稲毛区に住む 18 歳以上の人が地域のお祭りに参加する要因として、小学生以下の子どもの存在があるということが明らかになった。地域を活性化していくためには、子どもがいない層あるいは子どもから手が離れた層にも魅力的に感じてもらえるような祭りづくりをしていく必要があるのではないだろうか。（文責・城もも子）

1.2 千葉市のプロスポーツチームを応援する地元住民とは？

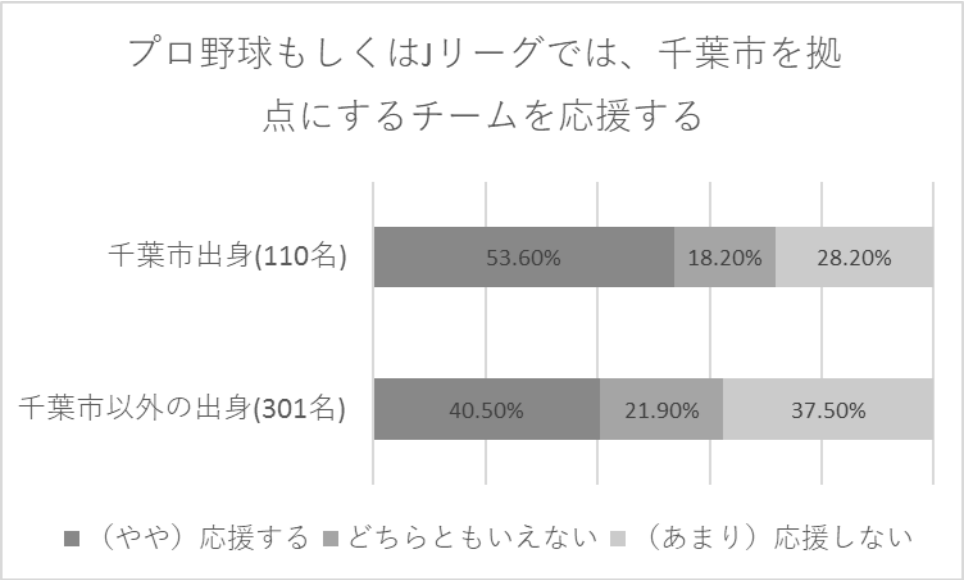

図 1.2 出身地別にみた千葉市にあるプロスポーツチーム応援（411 名）

千葉市には、プロ野球や J リーグのチームなど、千葉市を拠点としてもつプロスポーツチームが複数あり、それらのチームは地域との連携を図り、地元住民の応援を促している。では、千葉市を拠点としてもつチームを応援している「地元」住民とは誰なのだろうか。都市部である千葉市は、市外から人口が流入してくる地域でもある。千葉市に住む人々を出身別にみた場合に、チームを応援している人の比率は変わるのだろうか。

図 1.2 は、「プロ野球もしくは J リーグでは、千葉市を拠点にするチームを応援する」という質問の回答を、中学卒業時に千葉市に住んでいた人と、千葉市以外に住んでいた人に分けて調べたものである。千葉市出身の人は、千葉市以外の出身の人に比べて、千葉市を拠点にもつチームを応援する人が多いことが際立つ。現在千葉市に住んでいる人においては、出身地が千葉市であるかによって、千葉市のチームを応援するということにかんして差が出ることが調査結果からわかる。

スポーツの競技自体に地域性はないのにもかかわらず、出身地とチームの拠点となっている地域が同じだと、そのチームを応援するというのは興味深い。確かに、千葉市出身の人は千葉市の居住歴が長く、チームとかかわる機会が多いから応援していると考えられるかもしれない。しかし、人は出身地という地域に対してアイデンティティをもち、その意識が介在して、出身地と同じ地域を拠点とするチームを応援しているとも考えられる。人々は、単に競技としてだけでなく、自分のもつ地域に対する意識との関わりにおいてもスポーツを見ていて、だからこそさらに、見るにとどまらずに応援するという心理、行動につながっているのではないだろうか。（文責・木村宏人）

1.4 家事や育児に向いた性別がある？

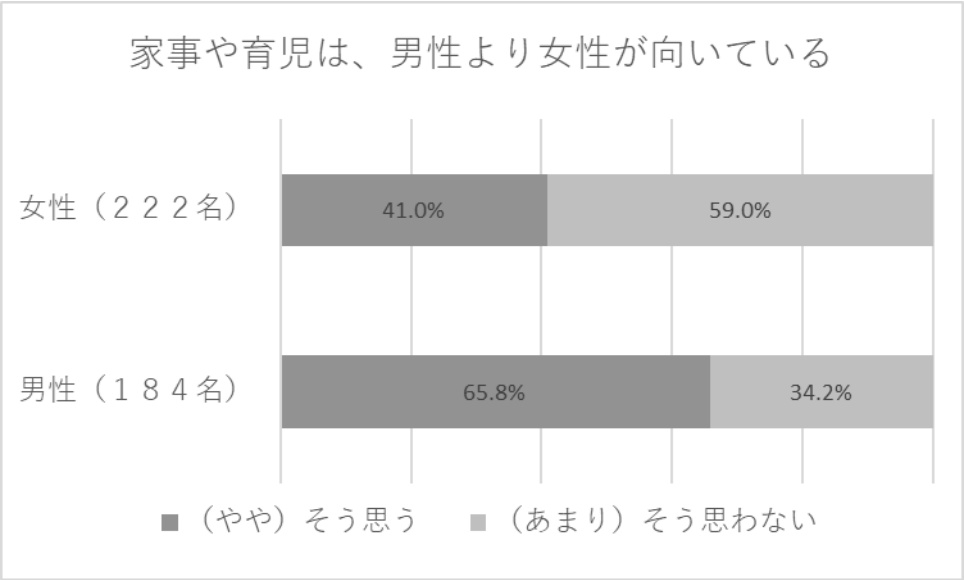

図 1.4 男女別にみた、家事や育児は女性が向いているへの賛否（406 名）

女性の社会進出に伴い、従来の性別役割分業意識は薄れつつある。私たちの調査においても、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という質問に対する回答は、「(あまり)そう思わない」が約8割だった。一方で、「家事や育児は、男性より女性が向いている」という質問に対する回答は、「(やや)そう思う」と「(あまり)そう思わない」が約半数ずつで、家事や育児が女性の役割だという考えは根強いことが伺える。

図 1.4 は、「家事や育児は、男性より女性が向いている」という質問の回答を、男女ごとに調べたものである。男性は半数を優に超える人が「(やや）そう思う」と回答しており、女性と比較して男性のほうが、家事や育児は女性が向いているとする意見が多いことが分かる。また女性も「(やや）そう思う」が約 4 割と、家事や育児は女性が向いていると考える人が一定数いる。同調査の「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」に対する回答を男女別にみると「(やや）そう思う」と回答した女性が約 15%、男性が約 30%であること比較して、家事や育児に関する性別役割分業意識は「外と家庭」という分業とはまた別のところで男女それぞれに存在し、女性より男性がその意識が強いといえる。家事や育児が女性の役割とすると、社会進出が進む女性にとって仕事と家事・育児を両立させなければならないという負担が生じる。そうした負担の軽減を目指すとすれば、男性が感じている家事や育児への壁を取り払う仕組みづくりが有効だと考えられる。（文責・竹花美琴）

1.5 性役割意識が強いのはどっち？

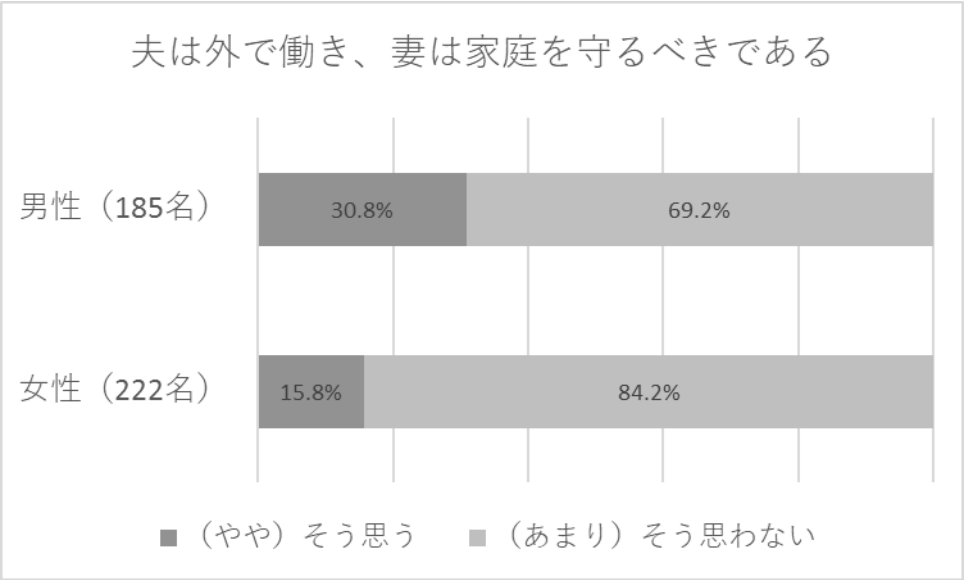

図 1.5 男女別にみた、夫は外、妻は家庭への賛否（407 名）

近年、ライフスタイルの多様化や、女性の社会進出推進政策などを経て、「男は仕事・女は家庭」という従来の性役割分業が否定されてきている。2016 年 4 月には「女性活躍推進法」が施行され、女性がその個性と能力を十分に発揮して社会で活躍するための環境整備が進められている。（連合ダイジェスト「昭和の意識！？『男は仕事、女は家庭』からの脱却を」2016/10/06）。

私たちの調査においても、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」に対し「そう思わない」が男性 69.2%、女性 84.2%と女性の方が多いものの、全体として従来の性役割意識に否定する人の割合が多いことが読み取れる。

しかし一方、男性の家事・育児への参画はなかなか進まない実情もある。家庭を持ちながら有償労働をしている女性は仕事に加え、家事・育児も一手に引き受ける場合も多いのが現状である。総務省のデータによると、平成 23 年時点で 1 日当たりの家事時間の平均時間は男性が 42 分、女性が 3 時間 35 分と、男女の間に依然として差がある（総務省「平成 23 年度社会生活基本調査」2011）。

このように、女性にも男性と同様の雇用機会が求められている時代潮流の中においても、今もなお女性のほうが男性よりも「家事労働の割合が高い」現状があることに、女性はフラストレーションを感じているのではないだろうか。これはあくまで一つの仮説なのだが、そう解釈してみると、性役割意識に反対する人に女性のほうが強いのもうなずける結果かもしれない。（文責・小杉真美）

1.6 年齢と性別役割分業意識には関係があるか？

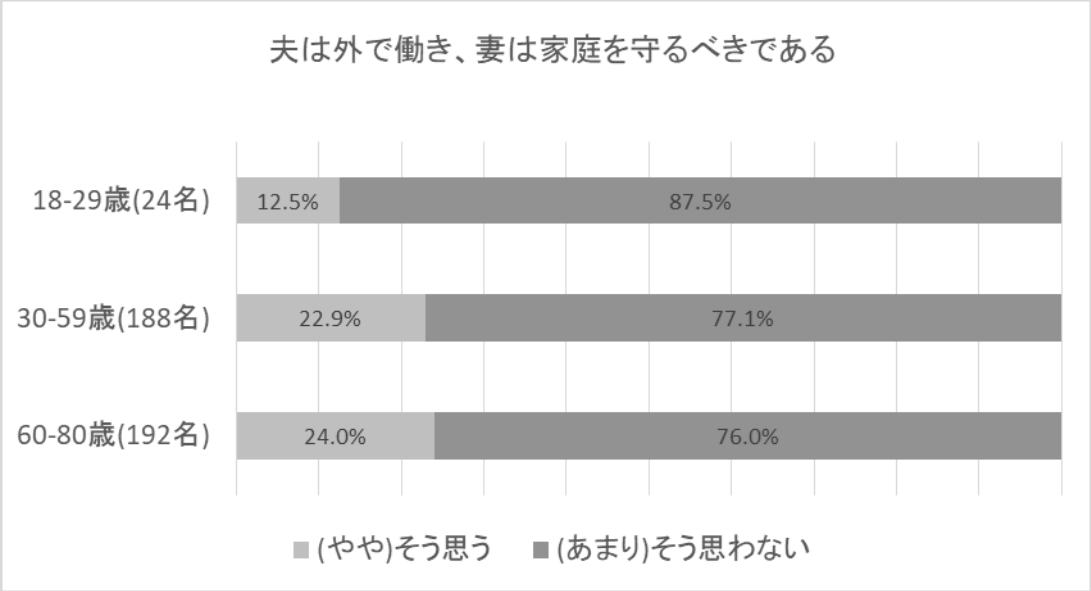

図 1.6 年齢別にみた、夫は外、妻は家庭への賛否（404 名）

平成 24 年度内閣府の調査において、「夫は外で働き，妻は家庭を守るべきか」という考えに対し、「賛成」が多数派となっている（「賛成」51.6%、「反対」45.1%）。賛成の割合を年齢別に見ると、70 歳以上、60～69 歳に続いて 20～29 歳の賛成割合が高い。一方、平成 28 年度調査において、「反対」が多数派となっている（「賛成」40.6%、「反対」54.3%）。しかし年齢別に見ると、平成 24 年度調査と同様に、70 歳以上、続いて 18～29 歳で賛成割合が高い。つまり、2 つの調査結果から、高齢層と若年層は性別役割分業を支持する傾向があるといえる（内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」平成 24 年度 10 月調査、平成 28 年度 9 月調査）。

では、稲毛区においては、性別役割分業の考え方について年齢別にどんな差が見られるのだろうか？　図 1.6 は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という質問の回答を、18～29 歳、30～59 歳、60～80 歳という若年層、中年層、高齢層の 3 つに分けて調べたものである。内閣府の調査と比較して、特に 18～29 歳の若年層において、性別役割分業に反対する割合が 8 割以上と高い。また、高齢層においても、内閣府調査と比較すると、反対の割合が 7 割以上と高くなっている。調査結果から、都市部である稲毛区は若年層を中心として、性別役割分業に否定的な傾向があることがわかる。

内閣府調査と稲毛区の調査結果が異なるのは、都市規模が関係あるのだろうか。稲毛区の特徴として、千葉大学などの高等教育機関や放射線医学総合研究所などがあり、文教の街であることが挙げられる。稲毛区においては、都市規模ではなく環境や文化によって、人々にリベラルな意識が醸成されているのかもしれない。（文責・小池千紘）

2018/04/20 一部を修正しました。

【調査主体】
国立大学法人
千葉大学文学部
社会学講座・専修

〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町 1-33
メール yoshioka@chiba-u.jp